

## 日本気象学会創立125周年記念事業報告

### 125周年記念事業実行委員会\*

社団法人日本気象学会は今年（2007年）、創立125周年を迎えた。125周年を迎えるにあたり、第33期理事会は2005年春に「125周年記念行事準備委員会」を設け、記念事業の準備に着手した。2006年6月、第34期理事会において同委員会は、「125周年記念事業実行委員会」に改組され、引き続き記念事業の準備にあたってきた。同委員会においては記念事業として、2007年度春季大会時の記念式典の実施並びに記念国際シンポジウムの開催、「天気」、「気象集誌」および「気象研究ノート」における特集号の発行等を行うことを決定した。本年12月、無事に全ての記念事業を終えることが出来た。これもひとえに会員各位のご協力の賜物である。ここに改めて御礼申し上げるとともに、各記念事業についてご報告する。

#### 1. 創立125周年記念式典

創立125周年記念式典は、春季大会開催期間中の2007年5月14日13時30分より、国立代々木オリンピック記念青少年総合センターにおいて、各界来賓のご臨席のもと、多数の会員の参加を得、以下の式次第に従って盛大に挙行された（第1図）。

##### 式次第

- ・ 開式
- ・ 理事長式辞
- ・ 来賓祝辞

文部科学省研究振興局長

日本学術会議会長

地球惑星科学連合運営会議議長



第1図 記念式典で式辞を述べる新野理事長。

気象庁長官

- ・ 祝辞紹介
- 中国気象学会理事長
- 韓国気象学会会長
- ・ 功労者感謝状授与
- ・ 閉式

式典は、新野 宏理事長の式辞に引き続いて、文部科学省徳永 保研究振興局長（代理：大城 功専門官）、日本学術会議金沢一郎会長、地球惑星科学連合運営会議浜野洋三議長、気象庁平木 哲長官（代理：佐藤信夫観測部長）の各位から、ご祝辞をいただいた。次に中国気象学会の Dahe Qing 理事長並びに韓国気象学会の Tae Young Lee 会長から寄せられた祝辞を、古川実行委員会委員長が披露した。次に、学会事務局の運営や「天気」、「気象集誌」の編集にそれぞれ長年にわたって貢献された、伊藤嘉一氏、島津成之氏、館 英夫氏、遠藤和子氏、本田恭子氏に、感謝状と記念品が贈呈され、14時30分に閉会した。

以下に、理事長式辞、来賓祝辞等を掲載する。

\* 古川武彦（委員長）、宮原三郎（副委員長）、藤部文昭、岩崎俊樹、山崎孝治、近藤裕昭、板東恭子、多田英夫。

© 2007 日本気象学会

## 理事長式辞

本日ここに文部科学省の徳永 保研究振興局長（代理出席）、日本学術会議の金澤一郎会長、日本地球惑星科学連合の浜野洋三運営会議議長、気象庁の平木哲長官（代理出席）のご臨席の栄を賜りますと共に、中国気象学会理事長並びに韓国気象学会々長からのご祝辞を賜り、社団法人日本気象学会創立125周年の記念式典を挙げていただけますことは、私ども日本気象学会会員一同にとって誠に喜びに堪えないところでございます。

日本気象学会は1882年（明治15年）5月3日に東京気象学会の名の下に創立されました。当学会の歴史につきましては、創立100周年特別企画として、機関誌「天気」の第29巻4月号に、河村 武氏ほかによる詳しい解説がありますので、改めて詳しく述べることはいたしません。しかし、今年、東京大学が創立130周年、京都大学が創立110周年を迎えるという事実を考え合わせますと、当学会の先達が如何に進取の気性に富んでいたかがわかります。ちなみに、設立当時の会員数は僅かに38名だったということです。その後、1886年には、大日本気象学会と名を改め、250名の会員と共に再出発を図りました。更に、1941年には、文部省の認可をいただき、社団法人日本気象学会となって、学術のみならず社会的にも重要な役割を果たすための一歩を踏み出しました。本年（2007年）4月9日現在の会員数は4085名となっております。設立以来の125年間には、明治末期の経済的な危機、第2次世界大戦中の気象学全般にわたる未曾有の困難な状況など、数々の苦難がありました。しかし、これらの困難を乗り越え、学会活動を長きに亘って維持、発展させてこられた先輩諸氏の熱意とご努力に、改めて心より感謝申し上げる次第です。

学会創立125周年を迎えるに当たり、理事会では、2005年春から廣田 勇第33期理事長のご指示のもと、古川武彦理事を委員長として125周年記念行事準備委員会を設置し、更に2006年4月からは実行委員会として、種々の記念行事や事業の準備を進めて参りました。記念行事と致しましては、この春季大会において、記念式典や記念国際シンポジウムを行うことと致しました。また、記念事業として、「気象集誌」においては、内外の第一線の研究者による気象学の各分野のレビューを掲載した特別号を7月末に刊行致します。また、「天気」においては、本年1年間を通して

各号に4編ずつ計48編の、気象学の各分野の最近の発展をレビューする記念解説の連載を行うこととし、既に連載が始まっております。さらに、「気象研究ノート」では2冊の記念号の刊行を予定し、既に刊行された「次世代へ伝えたいこと—あの一からの助言—」と題した1冊目には諸先輩の方々からの経験談やアドバイスが掲載されています。「次世代への架け橋—今、プロジェクトリーダーが語る—」と題した2冊目では、気象学会が関係してきた大型プロジェクトの解説が掲載される予定です。これらに加えて、「気象集誌」と「天気」では、会員の皆様の利便性の向上を図るため、第1巻からの内容の電子化（pdfファイル化）とインターネットによる公開を計画し、「天気」については既に4月1日より公開されています。学会創立75周年並びに100周年記念に際して執筆された、本学会の歴史や先輩諸氏のご努力の足跡を示す数々の記事、現在もその価値を失うことのない優れた解説などを瞬時に紐解くことができるようになったことは、多くの会員の方、とりわけ若い会員の方にとって大変有益ではないかと思えます。「気象集誌」の電子化計画は科学技術振興機構のJ-STAGEというサービスを利用することとなっておりますので、今しばらくお待ちいただくことになろうかと思えます。1981年以前の「気象集誌」の掲載論文はWeb of Scienceに登録されていないこともあり、この計画が実現すれば過去の「気象集誌」の論文が海外の研究者の目に触れやすくなるものと期待しております。

さて、1982年に創立100周年をお祝いしてからの気象学をとりまく環境は、劇的と言ってよいほど大きく変わって参りました。国際社会におけるわが国の地位の向上に伴い、1993年にはIAMAP（国際気象学大気物理学協会）とIAHS（国際水文科学協会）共催のIAMAP/IAHS横浜大会、2003年にはIUGG2003（第23回国際測地学・地球物理学連合総会札幌大会）などの大きな国際会議が開催され、日本気象学会はその開催に積極的に参画して参りました。また、近年、その重要性を増している衛星観測の世界でも、TRMM（熱帯降雨観測衛星）、ADEOS（地球観測プラットフォーム技術衛星）、ADEOS-IIなどの地球観測衛星の計画、運用、データ解析に大きく貢献してきました。

国際プロジェクトでは、WCRP（世界気候研究計

画)の国際研究プログラムである GEWEX (全球エネルギー・水循環実験研究計画)を構成する研究計画として、1996年度～2004年度にかけて日本の主導の下に GAME (GEWEX アジアモンスーンエネルギー・水循環研究観測計画)が行われ、多くの成果を収めました。この他、同じく WCRP のもとで1992-1993年にかけて行われた TOGA (熱帯海洋全球大気変動研究計画)の TOGA-COARE (海洋大気結合応答実験)など多くの国際プロジェクトに参加してきました。これらのプロジェクトを通じて、大気・海洋・陸面に関わる多くの学問分野の研究者間、さらにはアジアの研究者間の連携が深まってきたように思います。3年前から始まった日中韓3国の気象学会合同シンポジウムや AOGS (アジア・大洋州地球科学学会)など、アジア域での国際交流はますます重要性を増してきています。

日本気象学会が100周年を迎えた時代は、都市の環境問題がクローズアップされ始め、局地循環と汚染物質の発生・輸送などとの関わりが注目を集め始めました。それまで素過程を中心に研究を行っていた気象学にとって、1984年のオゾンホールが発見などを経て、大気化学過程などの複雑な過程を含めた学際的研究課題が重要性を持ってきました。更に、国際情勢として東西冷戦時代の終焉を迎え、軍事的課題に変わる新しい国際的政治課題として地球環境問題が浮上してきました。1988年には IPCC (気候変動に関する政府間パネル)が設置され、各国とも地球環境問題に力を入れるようになりました。このような流れを反映して、1993年の IAMAS/IAHS 横浜大会の後、IAMAP に大気化学の部会が設置され、これを契機としてその名前を IAMAS (国際気象学大気科学協会)と変更することになりました。素過程から始まった気象学の研究領域は、海洋との相互作用、化学過程との相互作用、地球環境問題へと広がり、更に生物圏をも視野に入れた動き (IGBP:地球圏-生物圏国際共同研究計画)が広がりつつあります。

2002年に完成した海洋研究開発機構の地球シミュレータは大気科学に質的な変化をもたらしました。中でも、全球を3.5 km 格子という、ある程度組織化された積雲群を解像することが可能な格子で覆ったモデルが開発され、10日程度の予測計算を行えるようになったことは、全球モデルに新しいパラダイムをもたらしたと思います。さらに、全球を20 km 格子で覆った気候モデルによる気候予測実験も可能となり、その

信頼性を客観的に評価することは未だ容易ではないにしても、地球温暖化に伴う熱帯低気圧の強度と発生数の変化や、20 km 格子のモデルに埋め込んだ非静力学モデルを利用した梅雨による降水等の変化について、議論の材料を提供することが可能となりました。このような成果を受け、IPCC の第4次報告書にはわが国から多くの貢献ができることになりました。このほか、大量の計算機資源を要するデータ同化やアンサンブル予報などにおいても、基礎的な研究が地球シミュレータを用いて進展しています。

このように、気象学会の研究領域は着実に拡大して参りました。1990年代に始まった大学院の重点化も研究者の増加に貢献することが期待されました。一方、経済的な面に目をむけますと、1986年から1990年代初頭まではいわゆるバブル景気を反映して、様々なものが膨張傾向にありましたが、バブルが崩壊した後、経済は停滞し、国の財政赤字も年々増加しています。2004年には国立大学の法人化がなされましたが、運営費交付金が毎年1%ずつ削減され、これに伴い定員や基盤的な経費も年々減少する時代に入っています。一時的に増加したかに見えた若手研究者のポストも長期的な見通しは決して明るくありません。研究領域が順調に拡大しつつある中で、研究に必要な資源が伸び悩むとき、どのようにして研究資源を最適配分するかという問題が近々生じてくると思います。

1995年の「天気」に当時の松野太郎理事長が「最も実用的な研究は最も基礎的な研究？」という表題の巻頭言を書かれています。その中で、環境や防災などの分野において、実用レベルで真に役に立つ信頼できる結果を得るための鍵となる課題は、結局基礎的な研究として現在でも解決がしていない問題であることが多いということを言われています。私もこのことに賛意を表したいと思います。2010年に稼働を目指す京速コンピュータや、GPM (全球降水観測衛星)、南極レーダーなど多くの大型プロジェクトが私たちに希望と共に多くの成果を与えてくれることは疑う余地はありません。しかし、拡大する研究領域のフロントと、基礎分野の充実、さらには従来から蓄積された学問体系の継承を、いかにバランスよく保って進めていくかは、大気科学の健全な発展のために真剣に考えていかなければならない課題だと思っています。

やや暗い話題になってしまいましたが、125周年にあたってつい先ごろ当学会にとって大変嬉しいニュースがございました。東京大学気候システムセンターの

高藪 縁教授が「女性科学者に明るい未来をの会」より猿橋賞を受賞されたことです。学会としては、今後とも本会会員の優れた業績を広く社会に紹介していく活動を続けて参りたいと考えております。

以上、125周年を迎えるにあたって、この25年間の学会の歩みと我々が抱える課題について簡単に述べさせていただきます。来るべき時代は、必ずしも順風満帆というわけには参りませんが、少くらの困難はあった方がその中から良い発想が生まれるということもあると思います。125周年となる今年を新たな出

発点として、今後の学会の大いなる発展を皆様と共に期待しつつ、着実な努力を積み重ねて参りたいと考えております。

最後になりますが、ご来賓の皆様には、お忙しい中、本記念式典にご臨席賜りましたことを深く感謝申し上げますと共に、今後とも当学会への変わらぬご指導・ご支援を賜りますよう心よりお願い申し上げます、私のご挨拶とさせていただきます。

平成19年5月14日

日本気象学会理事長 新野 宏

### 文部科学省研究振興局長祝辞

本日、ここに、社団法人日本気象学会創立125周年記念式典が挙行されるに当たり、一言お祝いの言葉を申し上げます。

日本気象学会は、明治15年に東京気象学会として創立されて以来、125年にわたり、気象に関する学術研究の推進に大きく貢献してこられました。

今日、天気予報は、確率予報の向上により、国民生活、経済・社会活動にとって欠かせない情報となっておりますが、それらはこれまでの気象学の発展の賜物であると確信しております。近年では、続発する気象災害を始め、異常気象や地球の温暖化など、気象に対する国民の関心は一層高まってきており、今後、持続可能で心豊かな社会の形成に向けて、気象学会の果たす役割は、より一層重要になってきております。

文部科学省では、研究者の自由な発想に基づく知的営みとしての学術研究の推進に努めているところでありますが、気象学の幅広い人材と知識が集約されている貴学会に対しては、各方面から多大な期待が寄せられているところであります。

本日の式典を契機に、貴会が、世界をリードする先導的な学会として、我が国及び世界の学術や科学技術、文化の発展にますます貢献されますことを祈念いたしますとともに、貴学会の歴代会長をはじめ会員の皆様方の御尽力に対し、心から敬意を表し、お祝いの言葉といたします。

平成19年5月14日

文部科学省研究振興局長 徳永 保

### 気象庁長官祝辞

日本気象学会が創立125周年を迎え、本日ここに記念式典が挙行されるにあたり、気象庁を代表して、一言お祝いの言葉を述べさせていただきます。

100周年の式典からはや25年が経過しましたが、台風、豪雨、豪雪など、シビアな気象現象は、今でも国民の生活に大きな影響を及ぼしています。

さらに、社会の高度化、複雑化に伴い、気象災害の形態も変化してきています。また、この25年間に徐々に関心が高まってきた地球温暖化の進行による異常気象や災害の増加も懸念され、様々な分野での研究や取り組みが重要となってきています。

このような状況の下、気象庁には従来にもまして防

災情報の的確な提供が求められております。このため、気象学をはじめとする地球各分野での最新の研究成果を随時取り入れて、観測機器の高度化や数値モデルの高度化などに取り組み、気象情報の改善に努めてきました。

気象庁が業務の改善を進めていく技術基盤は、様々な分野で進められている学術的な研究にあります。日本気象学会の場で発表され、議論されてきたことが、気象庁の個々の業務の改善の出発点になっているものがたくさんあります。

日本気象学会では様々な取り組みをされていると伺っておりますが、昨年度の竜巻災害をふまえて、今

回の学会でも竜巻のスペシャルセッションが開かれております。さらに、国民の関心が高まっている地球環境分野などでは数多くの研究成果が発表されるなど、その時代の状況に応じた研究の進展に貢献されています。

また、インターネットの時代に即した電子情報誌の発行など、研究成果の迅速な提供などに取り組みられなど活動を強化されていると伺っております。

このような取り組みを通じて、日本気象学会はますますその重要性を増しているものと存じます。

これは、ひとえに創立以降の多くの先輩、そして現

在の会員の皆様の長年にわたるご努力の賜物と心から敬意を表する次第であります。

気象庁としては、従来からも日本気象学会と研究交流活動を進めてきたところですが、今後さらに連携を強めて頂くことを期待しております。

最後に、創立125周年を節目として、日本気象学会がますますその活動を広げられ、世界の気象学の発展に貢献されることを祈念して挨拶とします。

平成19年5月14日

気象庁長官 平木 哲

### 中国気象学会理事長祝辞



## CHINESE METEOROLOGICAL SOCIETY

No. 46, South Avenue, Zhongguancun, Beijing 100081 CHINA

TEL: 86-10-68407133

FAX: 86-10-68406893

E-MAIL: [cms@cms1924.org](mailto:cms@cms1924.org)

10 May 2007, Beijing

### A Message of Congratulations

On the occasion of the 125<sup>th</sup> anniversary of the Japan Meteorological Society (JMS), the Chinese Meteorological Society (CMS) would like to extend to JMS, and through JMS, to Japanese Meteorologists our warmest congratulations and best wishes.

Japan Meteorological Society has a long history, and JMS plays an important role in the meteorological community. It is one of the meteorological societies in the world that established a good academic relationship with the Chinese Meteorological Society in the first place. Our two Societies have conducted long and fruitful exchanges, which play an important role in promoting the meteorological development in our two countries, in addressing the issues related to the impacts of global climate change, and in an effort to mitigate the loss due to meteorological disasters.

Along with social & economic development and accumulation of wealth, the meteorological disasters tend to give rise to increasingly heavier losses in countries. Particular, in recent years the weather & climate anomalies brought about serious impacts on people's lives and their properties, and on social communities and economies. Co-located in the East Asian region, China and Japan have many, if not all, common weather phenomena, such as typhoon, *meiyu*, etc. Therefore, it is of great significance for the two Societies to strengthen our exchanges and cooperation, aimed at reducing the losses caused by the meteorological

disasters. Therefore, the CMS, JMS and Korean Meteorological Society (KMS) have jointly signed the Memorandum of Understanding for better facilitating the development of atmospheric sciences, and for organizing international meteorological activities at the regional level. It has created a cooperation mechanism that has a far-reaching significance and a platform for conducting productive exchanges in meteorology, in order to further promote mutual trusts and cooperation among the scientist of China, Japan and the Republic of Korea, to share experiences and information, and to enhance role of the three meteorological societies in the East Asia region, and even in the world.

The 3rd Joint Meeting of CMS, JMS and KMS will be held in China. We in CMS hope that more Japanese scientists can participate in the meeting, to discuss issues of common interest. Finally, I wish celebrative activities of the 125<sup>th</sup> anniversary of the Japan Meteorological Society a complete success.

*Dahe Qing*

Dahe Qing,  
President of Chinese Meteorological Society  
Chinese Meteorological Society

韓国気象学会会長祝辞



한국기상학회 Korean Meteorological Society

No.704, Siwon Building, 508 Singil-dong, Yongdeungpo-gu, Seoul 150-050, Korea  
Tel : +82-2-835-1619, Fax: +82-2-849-1541, E-mail: komes@komes.or.kr

Dr. Hiroshi Niino  
President of the Meteorological Society of Japan  
The Meteorological Society of Japan  
c/o Japan Meteorological Agency  
1-3-4 Ote-machi, Chiyoda-ku  
Tokyo 100-0004, Japan

May 1, 2007

Dear Dr. Hiroshi Niino,

It is my great pleasure to congratulate 125<sup>th</sup> Anniversary of the Meteorological Society of Japan (MSJ). On behalf of the Korean Meteorological Society, I hereby send warmest and heartiest congratulations to you and all members of the MSJ, on the 125<sup>th</sup>

Anniversary.

Through its long history since 1882, the MSJ has greatly expanded its contribution to advances in meteorology from classical meteorology to modern, interdisciplinary issues such as climate changes. And it has also greatly expanded in scientific activities as well as in its number of members to more than 4,000. I am sure that the impacts of the MSJ to meteorological societies and scientific communities are very significant. Furthermore, the MSJ is now publishing three high-quality journals, that is the Journal of Meteorological Society of Japan (JMSJ), Tenki and SOLA, which are circulated globally and recognized as renowned international journals in the field of meteorology.

The MSJ has played many important roles and has shown leadership in global community as well as in Asian region. The MSJ has always been very active in international collaborative efforts. I think that global communities highly appreciate the MSJ's contributions to the advances in meteorology. In our region, the MSJ hosted the First Joint Conference on Meteorology of the three meteorological Societies of Japan, Korea, and China, which led to successful Second Joint Conference hosted by the Korean Meteorological Society at Ilsan, Korea, last year. I am sure that the momentum exerted by such Joint Conferences will establish a strong basis for regional collaboration in the field. I am also sure that such collaborative efforts of MSJ go beyond the region, and expand to global community. I would like to thank the MSJ for initiating such joint conference.

I sincerely hope that the years to come will bring everlasting expansion and prosperity to the MSJ, and that it won't be too long before we have chances to see more upcoming celebrations for the MSJ in the future.

Sincerely,



Tae Young Lee  
President, Korea Meteorological Society  
Professor, Yonsei University

## 2. 125周年記念国際シンポジウム

記念式典終了後15時より、中島映至理事を座長に約200名の参加者のもと、海外からお招きした2名を含めた5名の研究者の講演による125周年記念国際シンポジウムが行われた。

### 記念国際シンポジウムプログラム

テーマ：次世代の大気科学に期待すること

—Toward the Next Generation of Atmospheric Sciences—

- (1) Dr. Guy Brasseur NCAR  
“Modeling Earth System Interactions”
- (2) Dr. Brian Golding UK Met Office  
“Future Forecasting”
- (3) 上田 博 名大地球水循環研究センター  
「次世代降水系観測が拓く新しい気象学」  
“Next Generation Observations on Precipitation System”
- (4) 増永浩彦 名大地球水循環研究センター  
「次世代地球観測衛星を用いた気象学研究の展望」  
“Prospective Meteorological Studies Using Next-Generation Earth-Observing Satellites”
- (5) 植田宏昭 筑波大地球科学系  
「気候研究におけるデータ解析の意義と今後の課題」  
“A Climatological Perspective on Achievements and Problems of Data Analysis”

## 3. 「天気」記念事業

「天気」においては、本年1年間を通して各号に4編ずつ計48編の、気象学の各分野の最近の発展をレビューする記念解説の連載を行った。また、会員の利便性の向上を図るため、第1巻(1954年)から第52巻(2005年)までの電子媒体化(pdf化)を実施し、2007年4月から閲覧を開始した。

### 「天気」掲載記念解説一覧

- 1月号 大気の進化(阿部 豊, 田近英一), 都市のヒートアイランド(藤部文昭), 地球シミュレタ上の「仮想地球」(榎本 剛, 大淵 済), 気象ビジネス I 気象とメディア(森 朗)
- 2月号 地球温暖化予測の最近20年の進展(行本誠

史), 大気境界層: モデル研究を中心に(中西幹郎), 惑星気象学の近年の展開(松田佳久, 高橋芳幸, 林 祥介, 中島健介), 気象ビジネス II 応用気象と気象災害(登内道彦, 牛山素行)

- 3月号 モンスーン循環の形成とその変動プロセス—大気海洋相互作用と大気陸面相互作用から謎を解く—(川村隆一), 大気と陸域生態系の相互作用—水と二酸化炭素の交換過程に着目して—(桑形恒男, 渡辺 力, 三枝信子), 雲物理から雲科学へ(藤吉康志), アンサンブル予報とその利用(経田正幸, 林 久美)
- 4月号 地球システムモデリング(河宮未知生), 湿った局地循環(木村富士男), 大気放射研究の進展—エーロゾルと雲の放射効果の解明をめざして—(浅野正二), 気象学におけるデータ同化(三好建正, 本田有機)
- 5月号 オゾン層(佐々木 徹), 梅雨前線帯と集中豪雨—積乱雲が発達するための条件—(加藤輝之), 中層大気(佐藤 薫, 廣岡俊彦), 国境を越える天気予報(古川武彦)
- 6月号 中高緯度域の大気海洋相互作用(谷本陽一, 野中正見), アジアの梅雨・世界の梅雨(児玉安正, 山田広幸), 温帯低気圧の理論的研究—Eady解と現実の低気圧—(高藪 出), 力学的長期予報の現業化(前田修平, 小林ちあき)
- 7月号 中高緯度の季節内循環変動と異常天候—極東付近の冬季気候に関連して(本田明治, 高谷康太郎), 極地・寒冷域・僻地の気象観測(青木輝夫), 成層圏対流圏結合(藤原正智, 山崎孝治), ライダー(杉本伸夫)
- 8月号 熱帯域の大気海洋相互作用と気候変動—インド洋域の変動に着目して(升本順夫・堀井孝憲), 台風と熱帯擾乱(中澤哲夫), 黄砂(長田和雄), 気象と気候研究で利用される衛星搭載可視赤外イメージャとマイクロ波センサ(中島孝, 沖 理子)
- 9月号 温室効果ガス—炭素循環研究に着目して—(吉川久幸), 全球非静力学モデルへの道(佐藤正樹), 長期再解析 JRA-25(大野木和敏), 日本における気象レーダーの発展(佐藤晋介)
- 10月号 1 km メッシュの気象学(坪木和久), 物質輸送—長距離越境大気汚染—(秋元 肇), 気象・海洋データに対する多変量解析(谷本陽一),



- 水蒸気観測技術の発達とこれから (小司禎教)  
 11月号 地域・大陸スケールでの植生・気候相互作用  
 (安成哲三), 竜巻 (新野 宏), 地球流体力学  
 (GFD) (林 祥介), 気象学における情報処理  
 (堀之内 武)  
 12月号 古気候モデリング (阿部彩子・山中康裕),  
 水循環解析—データの作成と利用—(谷田貝亜  
 紀代), 山岳を用いた大気汚染観測: 富士山頂  
 の観測を中心に (土器屋由紀子), 初中等教育  
 における気象教育の展開 (坪田幸政, 高橋庸  
 哉)

#### 4. 「気象集誌」記念事業

「気象集誌」においては, 内外の第一線の研究者に  
 よる気象学の各分野のレビューを掲載した特別号を7  
 月末に刊行した。また, 第1巻第1巻 (1882年) から  
 第2巻第78巻 (2000年) までの電子媒体化 (pdf 化)  
 を計画し, 近日中に公開の見込みである。なお, この  
 電子アーカイブ事業は, 科学技術振興機構のJ-  
 STAGEにより行われている。

#### 「気象集誌」特別号目次

- Journal of the Meteorological Society of Japan,  
 Vol. 85B, July 2007, 403pp.  
 125th Anniversary Issue of the Meteorological  
 Society of Japan  
 Invited Review Articles  
 Preface  
 Y. LIU, B. HOSKINS, and M. BLACKBURN :  
 Impact of Tibetan Orography and Heating on  
 the Summer Flow over Asia.  
 Y. H. DING : The Variability of the Asian Sum-  
 mer Monsoon.  
 T. YASUNARI : Role of Land-Atmosphere Inter-  
 action on Asian Monsoon Climate.  
 S. YODEN : Atmospheric Predictability.  
 K. NINOMIYA and Y. SHIBAGAKI : Multi-  
 Scale Features of the Meiyu-Baiu Front and  
 Associated Precipitation Systems.  
 D. L. HARTMANN : The Atmospheric General  
 Circulation and its Variability.  
 M. YAMASAKI : A View on Tropical Cyclones  
 as CISK.

- T. G. SHEPHERD : Transport in the Middle  
 Atmosphere.  
 J. M. FORBES : Dynamics of the Thermosphere.  
 S. FUKAO : Recent Advances in Atmospheric  
 Radar Study.  
 D. L. WILLIAMSON : The Evolution of Dynami-  
 cal Cores for Global Atmospheric Models.  
 K. SAITO, J. ISHIDA, K. ARANAMI, T. HARA,  
 T. SEGAWA, M. NARITA, and Y.  
 HONDA : Nonhydrostatic Atmospheric  
 Models and Operational Development at  
 JMA.  
 W.-K. TAO : Cloud Resolving Modeling.  
 T. TSUYUKI and T. MIYOSHI : Recent Prog-  
 ress of Data Assimilation Methods in Mete-  
 orology.  
 M. KANDA : Progress in Urban Meteorology : A  
 Review.  
 S. MANABE and R. J. STOUFFER : Role of  
 Ocean in Global Warming.

#### 5. 「気象研究ノート」記念事業

「気象研究ノート」では, 長年, 気象の研究や教育  
 などに携わった人々の知識や経験, さらに学会が関係  
 してきた大型プロジェクトの記録などを次世代に伝え  
 るべく, 2冊の記念号を刊行した。「次世代に伝えたい  
 こと—あの一からの助言—」を第213号として,  
 また, 「次世代への架け橋—今, プロジェクトリ-  
 ーダーが語る—」を第215号として刊行した。

#### 「気象研究ノート」特別号目次

第213号「次世代へ伝えたいこと—あの一からの助  
 言—」

- 日本気象学会創立125周年特別号に寄せて: 新野  
 宏  
 はじめに: 山崎孝治  
 (1) 廣田 勇 指導者群像—戦後の我が国におけ  
 る気象学の系譜—  
 (2) 山田哲司 Mellor-Yamada 乱流クロー  
 ジャーモデルについて  
 (3) 栗原宜夫 私の気象人生 覚え書き  
 (4) 樋口敬二 地球から火星を考える—雪氷現象  
 を追って—  
 (5) 増田善信 気象学と気象事業—日本気象学会

- の社会的責任—
- (6) 原田 朗 気象の業務・研究・教育のはざま  
にあつて
- (7) 田中 浩 私立大学のすすめ
- (8) 岸保勘三郎・山田眞吾・前田修平 冬のユー  
ラシア大陸上のテレコネクション
- (9) Akira Kasahara (笠原 彰) 気象学教授と  
の出会い (Encounter with the meteorology  
professors)
- (10) Kikuro Miyakoda (都田菊郎) Italian Con-  
nection
- (11) 二宮洸三 気象研究における“ものの見方・  
考え方”
- (12) 近藤純正 大気境界層研究から温暖化資料解  
析まで
- (13) 荒川正一 荒川だしと比良八荒の現地を訪れ  
て思う
- (14) 吉川友章 気候変動因子の監視測定と局地気  
象の調節
- (15) 松本誠一 集中豪雨雪特別研究について
- (16) 立平良三 雨量予報の今後
- (17) 新田 尚 自然学としての気象学を求めて
- (18) 土屋 巖 気候変動と万年雪そして雪氷用語  
随想
- (19) 菊地勝弘 現地観測の成否は観測場所と観る  
眼で決まる
- (20) 小林壽太郎 ゾンデ開発の余韻—湿度とオゾ  
ンの計測—
- (21) 近藤洋輝 気候研究とその成果：科学と社会  
の関わり
- (22) 森 俊彦 次世代に伝えたいこと
- (23) 竹内清秀 会員みんなで学会活動を盛り上げ  
よう
- (24) 金光正郎 日米欧の数値予報センターと大学  
における体験からの私見
- (25) 寺内榮一 組織と人—「数値予報の現業化」,  
「静止気象衛星プロジェクト」の成功から学ぶ  
もの—
- (26) 田中豊顕 気象庁のパンフレットが与えた衝  
撃 大学生の認識変化と教育再生支援の可能  
性
- (27) 岩坂泰信 フィールド研究を成功させるため  
に
- (28) 藤谷徳之助 乱流から気候へ (観測の視点か  
ら)
- 第215号「次世代への架け橋 —今、プロジェクト  
リーダーが語る—」
- 日本気象学会創立125周年特別号第2部に寄せて：  
新野 宏
- はじめに：山崎孝治
- 第1章 気象庁の観測：石原正仁・牧原康隆・宮本  
仁美・堤 之智・松原廣司
- 第2章 日本の数値予報：佐藤信夫
- 第3章 地球シミュレータ・プロジェクト：現場報  
告：大淵 濟
- 第4章 温室効果気体の広域観測と地球規模循環：  
中澤高清・菅原 敏
- 第5章 大型航空機による大気化学観測 —BIBLE/  
PEACE 計画—：近藤 豊・竹川暢之・小  
池 真・白井知子・北 和之・小川利紘
- 第6章 全球降水観測 —TRMM から GPMへ—：  
中村健治・沖 理子・井口俊夫
- 第7章 成層圏オゾン層観測衛星 ILAS プロジェク  
トとその成果：笹野泰弘
- 第8章 MU レーダーが拓く気象と大気の科学：  
深尾昌一郎
- 第9章 日中共同プロジェクト ADEC —風送ダ  
ストの大気中への供給量評価と気候への影  
響—：三上正男
- 第10章 GAME (アジアモンスーンエネルギー・  
水循環研究観測計画)—アジア発の WCRP  
国際共同研究プロジェクト—：安成哲三